

13 世紀中頃から 14 世紀初頭前後に位置付けられる。また、高台の作りが粗いものが 1 点出土しており、14 世紀初頭から 14 世紀後半の資料と推定される。

白磁はすべて第 24 次調査 2 区から出土した。口禿げの碗と皿があり、13 世紀中頃から 14 世紀初頭前後に位置付けられる。青白磁は合子の蓋が第 24 次調査 2 区東から 1 点出土している。

瀬戸・美濃焼は第 22 次調査 1 区包含層から出土した。完形の平碗が 1 点のみ出土し、他の器種は見られなかった。時期は 15 世紀とした。

珠洲焼は珠洲Ⅰ～Ⅴ期にわたって出土している。珠洲Ⅰ・Ⅱ期に比定されるものが多く、壺・甕類のうち時期を特定できたものはすべて珠洲Ⅰ・Ⅱ期の範疇であった。Ⅲ期には減少するが、Ⅳ期で再び増加する。一方、珠洲Ⅴ期に位置付けられるものは片口鉢 1 点のみで、これ以降、確認できなくなる。北沢窯産と推定される北越窯産陶器は珠洲Ⅰ期の珠洲焼と共伴していることから、12 世紀後半に比定した。

中世土師器は破片数の割合で最も多く出土している。ロクロ成形で底部が糸切りの皿が多く出土しており、このうち小型で底部が厚く、口縁が直線的に伸びる形態が主体を占める。この形態の皿は 12 世紀後半～13 世紀の範疇に位置付けられ、特に 12 世紀後半が中心と考える。これに碗形の大皿が伴う。同じく底部糸切りで、底径が大きく器壁の厚さがほぼ一定になる形態の皿は 13 世紀代の資料と推定される。ロクロ成形で底部がヘラ切りの皿は 13 世紀後半～14 世紀が主体となろう。手づくね成形の皿はそれほど多くないが一定量出土しており、13～14 世紀代の範疇の資料であると考えられる。

これら土器・陶磁器の様相と珠洲編年を参考として、本報告の中世を 2 時期に分け、中世 1 期、中世 2 期と設定した。

中世 1 期は 12 世紀後半から 13 世紀前半とした。珠洲Ⅰ・Ⅱ期に相当する。珠洲焼は片口鉢が主体であるが、壺・甕類も多く出土している。北越窯産陶器も確認される。輸入陶磁器では青磁と青白磁が出土している。青磁は同安窯系と龍泉窯系が確認された。中世土師器はロクロ成形が主体で、なかでも底部が厚く小型の皿が多く出土している。

中世 2 期は 13 世紀後半から 15 世紀とした。珠洲Ⅲ～Ⅴ期に相当する。珠洲焼は片口鉢が主体で、壺・甕類は減少する。輸入陶磁器は青磁と白磁が確認された。青磁は龍泉窯系のみで、優品と思われる製品も出土している。白磁はすべて口禿げであった。中世土師器は当期もロクロ成形が主体で、底部ヘラ切りの皿が新たに確認される。手づくね成形皿は前段階から出現していたと考えるが、当期で出土量が増加する。当期後半の 15 世紀には瀬戸・美濃焼と珠洲焼がわずかに見られる程度で、15 世紀後半には遺物は確認できなくなる。

同じ沖ノ羽遺跡で新潟市が調査した第 18・19 次調査〔遠藤・澤野ほか 2014〕でも中世の遺物がまとまって出土している。中世土師器が主体で、次いで珠洲焼が多く、輸入陶磁器が少ないという様相は本報告と類似する。ただ、本報告では同安窯系の青磁や龍泉窯系の優品が出土している。中世土師器皿については第 18・19 次調査でもロクロ成形が主体を占めており、なかでも底部糸切りで底径が大きく浅身の大皿多く出土しているのに対し、本報告では同様の形態はあまり見られず、底部が厚く口縁が直線的に伸びる小皿が主体となる。また、珠洲焼では第 18・19 次調査は珠洲Ⅲ・Ⅳ期が最も多いのに対し、本報告は珠洲Ⅰ・Ⅱ期が多く出土している。このように、主体となる時期や土器様相に多少の相違点はあるものの、両者とも 12 世紀から 15 世紀にわたり遺物が継続的に出土しており、本報告と第 18・19 次調査はほぼ並行して存続していたと考えられる。

D 三耳瓶（三耳形双耳瓶 986）について

沖ノ羽遺跡では、3 か所に把手状の耳を有する瓶（986 以下、三耳瓶）が出土している。三耳瓶については北陸系とみられ、新潟県内での出土例が少ないことから、概要を記して若干の考察を行う。沖ノ羽遺跡出土資料については、厳密には「長胴瓶（瓶 D）」または「双耳瓶三耳形態」という呼称が適当と思われるが〔北野 1999〕、県内先出事例〔笹澤 2003b〕から「三耳瓶」の呼称を用いる。なお、以下の記述において、特に断りなくローマ

数字のみで表記される年代は、田島編年〔田島 1988〕を表し、暦年代観は各氏の論考より引用した。誤りがあれば筆者の責によるものである。

沖ノ羽遺跡出土三耳瓶について整理しておく。第24次調査2区東SD128（以下、SD128）において、溝方向と平行に横位で出土した（写真図版190）。口縁の一部を欠損するのみで、ほぼ完形である。法量は、器高34.2cm、口径13.5cm、底径14.2cm、胴部最大径24.4cm、実測図からの復元容量は約7.9リットルである。両肩部の相対する位置および胴部上半の3か所に把手状の耳が付く。両肩部の耳は厚さ1.4cm、全長7cm、胴部の耳はこれよりやや大きく厚さ1.8cm、全長11cmである。内径0.8～1cmの穿孔がそれぞれ1か所施され、耳部下半に段を有する。穿孔部周辺には使用に伴う磨滅痕は見られない。胴部外面下半にはタタキメおよびヘラケズリ痕が残る。肩部から頸部へは鋭く立ち上がり、頸部は別作り成形後に接合したものと考えられるが、明瞭な接合の痕跡は確認できない。胴部内面に当て具痕はなく、丁寧なクロロナデが施されており、胴部から肩部の成形技法は不明である。底部に高台は付かず平底で、ヘラ状工具による擦過痕が残る。胎土には直径1～3mm程度の長石・石英を多く含み、A群阿賀北産の特徴を示す。共伴資料としては、須恵器有台杯（985）・土師器無台碗（987～992）があり、須恵器有台杯は新津丘陵産と推定され春日編年IV2～V期に、土師器無台碗は春日編年VI2・3期～VII期に位置付けられる。共伴遺物には時期差があるが、下限時期から遺構の埋没時期は春日編年VI2・3期～VII期と考えられる。

三耳瓶について、県内消費遺跡で本遺跡を含めて3例、中部・関東・東北の生産遺跡では管見の限り5窯跡群で類例を確認できた（第59図）。

北陸では、福井県鯖江市の丹生古窯群（第59図3〔田中 1988〕）と石川県小松市の南加賀窯跡群（第59図4～8〔望月 2002、宮下・望月 1989、石川県教委 1975〕）において三耳瓶の例がある。丹生古窯群樫津古窯で採集された三耳瓶は第59図2の大戸窯のものと類似した耳部と容量を有する。南加賀古窯群では、二ツ梨一貫山窯跡〔望月 2002〕、二ツ梨横川1号窯跡〔宮下・望月 1989〕、戸津5号窯跡〔石川県教委 1975〕で出土がある（第59図4～8）。望月精司氏が三耳形の双耳瓶について「出現期であるIV1期（8世紀中頃：筆者註）には両耳の中央下位にもう一つの把手がつけられる三耳形態を呈していたものであり、釣瓶のように使われる耳の配置が本来の把手の機能であったと思われる。」とされ、その時期と変遷について、「三耳形態は出現期のみで、V期（9世紀前葉～中頃：筆者註）には双耳形態へほぼ移行してゆくが、大型にのみ三耳形態が残存する。V1期の戸津5号窯〔石川県教委 1975〕で大型品に確認できるし、VI2期（9世紀後葉）まで残存が確認できる」とまとめられている〔望月 2002〕。また、北加賀・能登地方の古代須恵器貯蔵具についての論考の中で出越茂和氏は、双耳瓶について、「北陸に広く流通している平安時代を代表する器種の一つであり、（中略）8世紀後半に3耳タイプが出現し、独自の耳を付加し、V期以降発達する。（中略）V期の摘まみは小振りで1・2孔を原則とするが、VI期には鰭状に肥大化して体部下半まで延び3孔が出現する。北陸以外では摘まみの肥大化はあまり顕著でない。口頸部や体部の器形から液体性容器と推測されるが、容量は小2～4ℓ、中4～7ℓ、大8～13ℓの3法量に分かれ、大型品はV期以降出現する。」とされている〔出越 1999〕。

北加賀～越中の窯跡の中で、立山町上末釜谷窯においても、南加賀古窯群よりやや遅れてIV2期には双耳形双耳瓶の生産が始まり、V2期には大中小の3法量へ分化し、VII1期まで生産が確認されている〔武田・青山・内田 1999〕が、同地域では他の古窯群を含めて三耳瓶の生産はされないようである。

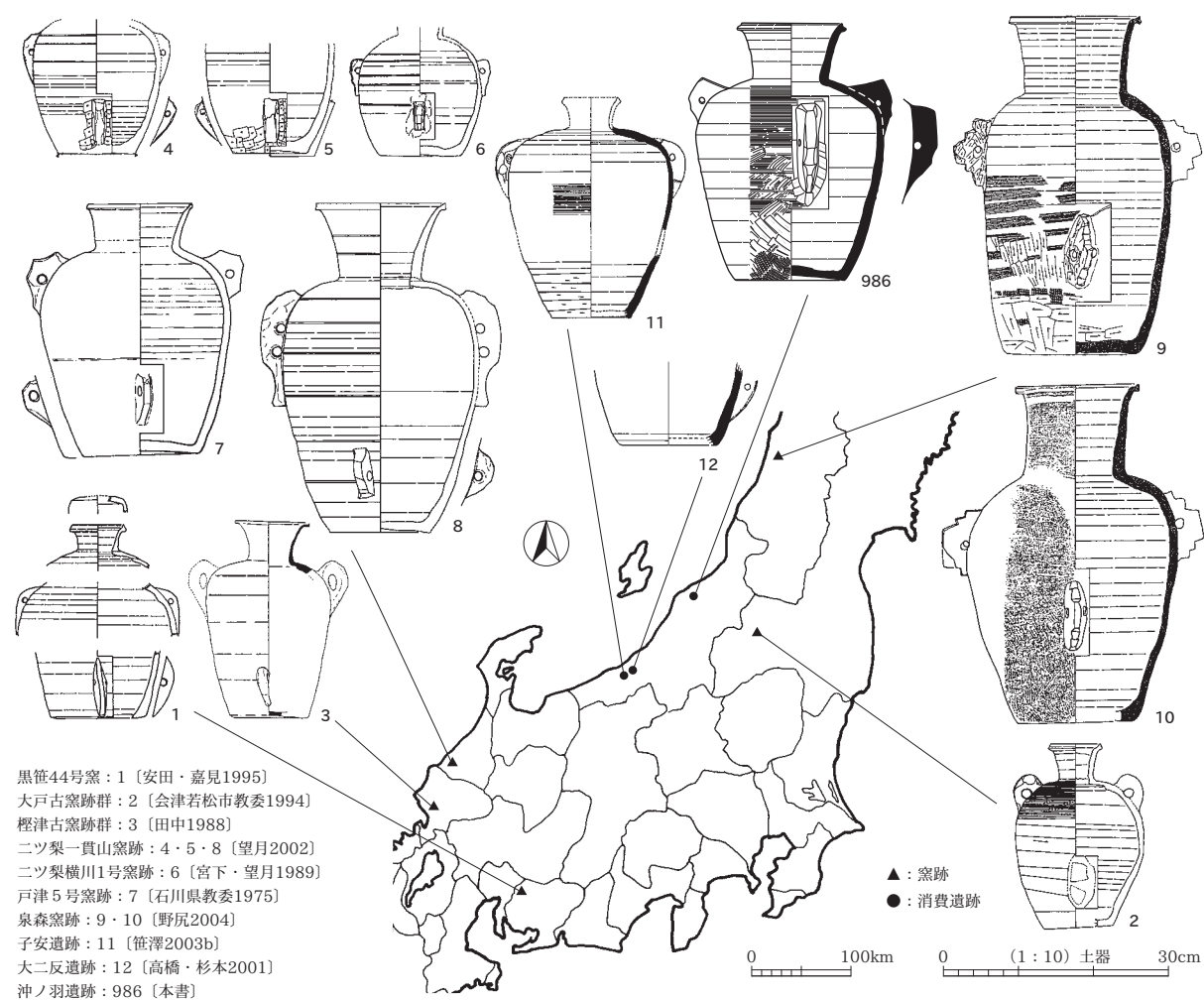
山形県泉森窯では、2点の三耳瓶（第59図9・10）が出土している。同窯跡は、平安時代の国府と推測される城輪柵跡に製品や瓦を供給したと考えられ、9世紀第1四半期に位置付けられている〔野尻 2004〕。短い角形の耳部や大型に分類される器形は、北陸の影響を受けたものであろう。周辺や以北では双耳形を含めて類似する器種の生産は確認できない。

愛知県猿投窯群では、篠岡81号窯〔中嶋 1982〕・折戸80号窯〔日進町教委 1978〕・黒笹44号窯（第59図1）〔安田・嘉見 1995〕において三耳瓶が出土している。篠岡81号窯・折戸80号窯は底部付近の耳部および底部の

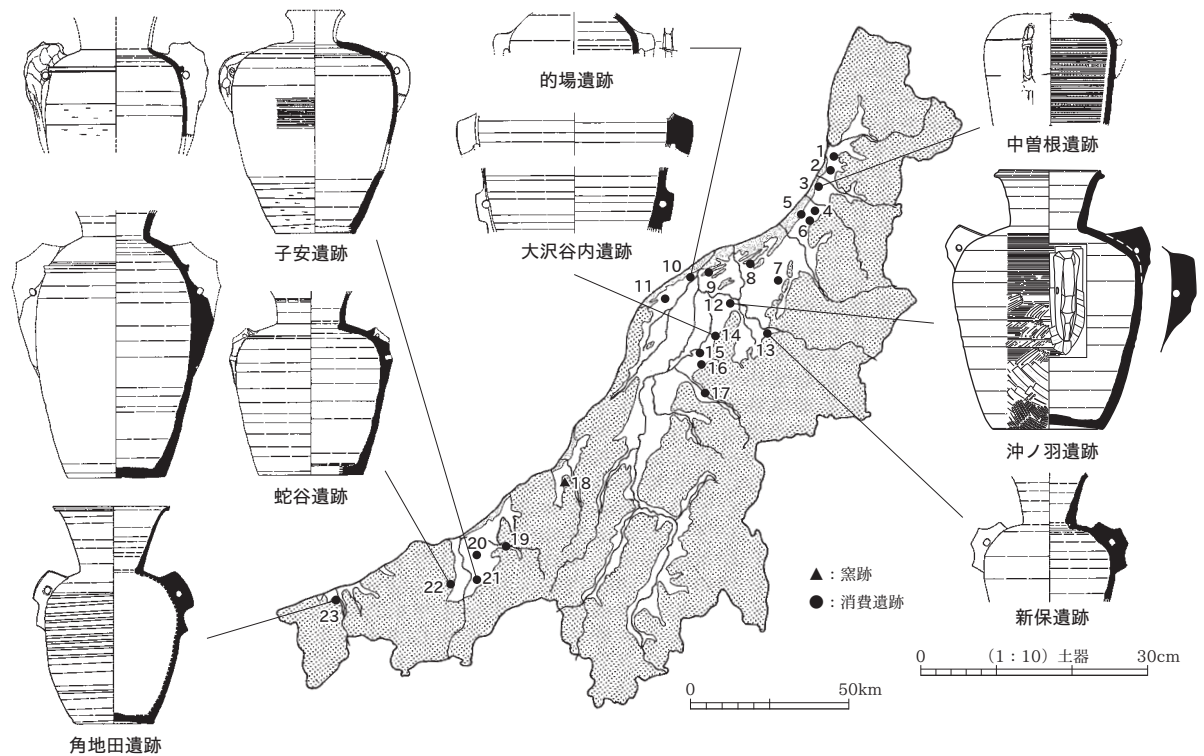
みの出土で、黒笹 44 号窯では口縁および肩部片もあるが、全体形を復元できる資料はない。いずれも丸みを帯びた耳部を有し、復元底径 11.2 ～ 12.4cm と本遺跡資料より一回り細く小ぶりの器形である。尾野善裕氏によれば「双耳瓶はⅤ期（8 世紀中葉～：筆者註）以降にしか認められない器形」とされ〔尾野 2000〕、三耳瓶の出土している 3 窯跡はいずれも 8 世紀前葉～後葉の双耳瓶が認められる初期段階に位置付けられる。双耳瓶は二耳形態となり丸形の耳部や頸部形状、法量の変化は少なく 9 世紀後半まで生産されるようである。また、長野県中野市清水山窯跡〔土屋ほか 1997〕では、環状把手に近い耳部を有する二耳形双耳瓶の出土がある。猿投窯や岐阜県美濃須衛窯の影響を受けたとされる福島県大戸窯群の例（第 59 図 2、南原 33 号窯出土：8 世紀後葉〔会津若松市教委 1994〕）では器形や、初段階にのみ三耳瓶が存在する状況も類似する。管見の限り関東及び大戸窯跡を除いた東北太平洋側では、双耳瓶の生産は確認できない。

生産地の状況を踏まえ、新潟県内における三耳瓶を含む双耳瓶の出土状況についてみていきたい。抽出にあたっては、器形全体を復元できるものが極めて少ないことから、報告書掲載の図・写真から双耳瓶の耳部の可能性のあるものを極力取り上げた。管見の限り 23 遺跡 27 点の出土がある（第 60 図）。主なものについて概要を述べる。

磐舟・沼垂・蒲原郡域の下越では沖ノ羽遺跡を含む 16 遺跡で 18 点の出土がある。中曽根遺跡〔青木ほか 2006〕では、平安時代の自然流路から耳部を欠く肩部片 1 点が出土している。耳は 1 孔で、胎土はやや粗とされ、阿賀北産の可能性がある。中倉遺跡〔吉村 2003〕では、包含層で小形 1 孔の耳が付く肩部片 1 点が出土している。耳部が双耳瓶のものとしては小さく、四耳壺の可能性もある。腰廻遺跡〔川上 2002〕では、自然流路から丸い小形 1 孔の耳部と体部上半から肩部に突帯が付く双耳瓶 2 点が出土している。全体形状や法量は前述の福島



第 59 図 三耳形双耳瓶の分布



No.	遺跡名	種別	時期	出土点数	出土状況ほか	文献	備考
1	樋渡遺跡・堀下遺跡	集落跡	—	1	SX45（自然地形落ち込み）	〔田辺・大賀2002〕	
2	道上遺跡	集落跡	—	1	包含層	〔田辺・土生2001〕	
3	中曽根遺跡	集落跡	8C～10C	1	SR1	〔青木ほか2006〕	
4	中倉遺跡	集落跡	8C～9C	1	包含層	〔吉村2003〕	
5	下町坊城遺跡	集落跡	8C～17C	1	包含層	〔水澤2001〕	
6	蔵ノ坪遺跡	集落跡	8C～9C	1	SD812	〔飯坂ほか2002〕	
7	腰廻遺跡	集落跡	—	2	SR7・13	〔川上2002〕	
8	新五兵衛山	集落跡	8C～9C	1	包含層	〔関ほか1989〕	
9	山木戸遺跡	集落跡	—	2	包含層・客土	〔諫山2004〕	
10	的場遺跡	集落跡	—	1	包含層	〔小池・藤塚1993〕	
11	前田遺跡	遺物包蔵地	—	1	包含層	〔廣野2000〕	
12	沖ノ羽遺跡	集落跡	8C前葉～10C	1	SD128	〔本書〕	
13	新保遺跡	集落跡	9C	1	SK47	〔山崎・鈴木ほか2004a〕	
14	大沢谷内遺跡	集落跡	9C末	1	9区SB3	〔相田・金田ほか2015〕	
15	道上遺跡	集落跡	—	1	C区SI01上面	〔田畑1994〕	
16	長沢遺跡	遺物包蔵地	—	1	包含層	〔田畑2002〕	
17	飯田五輪峠遺跡	遺物包蔵地	—	1	—	〔金子ほか1977〕	
18	雨池窯跡	窯跡	9C前半?	1	—	〔笹澤1999〕	
19	大二反遺跡	集落跡	8C後半～9C前半	1	—	〔高橋・杉本2001〕	三耳瓶
20	保坂遺跡	集落跡	8C前半～10C前半	1	包含層	〔小島・中西ほか1997〕	
21	子安遺跡	集落跡	9C後半～10C前半	2	SD309	〔笹澤2003b〕	三耳瓶 1点 北陸系双耳瓶 1点
22	蛇谷遺跡	集落跡	9C中葉～11C初頭	2	456：Pit49 包含層	〔土橋2005〕	456：富山上末窯搬入
23	角地田遺跡	集落跡	10C中葉	1	SD853	〔實川ほか2009〕	

※時期は、各文献の記載による。または、出土遺構時期。

第 60 図 県内の双耳瓶出土遺跡

県大戸窯のものに類似するが、耳の形状はほかに類例がなく異質である。新保遺跡〔山崎・鈴木ほか2004a〕では、SK47で須恵器無台杯と共伴して頸部から胴部片が出土している。肩部に北陸系古相に類似する短い1孔の耳部が付き、胎土には石英・長石を多く含むとされ、阿賀北産の可能性がある。下町坊城遺跡〔水澤2001〕、蔵ノ坪遺跡〔飯坂ほか2002〕、新五兵衛山遺跡〔関ほか1989〕では、整形が比較的粗く、角形で短い1孔の耳部がそれぞれ1点出土している。蔵ノ坪遺跡、新五兵衛山遺跡のものは胎土に長石・石英を多く含む阿賀北産の特色を示す。一方、山木戸遺跡〔諫山2004〕、前田遺跡〔廣野2000〕では、胎土精緻で丁寧に整形された耳部片が包含層から出土しており、荒川以北の樋渡遺跡・堀下遺跡〔田辺・大賀2002〕・道上遺跡〔田辺・土生2001〕や、田上町道下遺跡〔田畑1994〕・長沢遺跡〔田畑2002〕でも類似する耳部の出土がある。

また、大沢谷内遺跡〔相田・金田・八藤後ほか 2015〕では、北陸系の新相に存在する鰭状の耳部が付くものが掘立柱建物の柱穴から出土しており、的場遺跡〔小池・藤塚 1993〕のものもこれに類似する。いずれも阿賀北窯産とは異なる精緻な胎土を有し、丁寧な整形が施される。

古志郡を中心とする中越では 2 遺跡 2 点の出土で、飯田五輪峠遺跡〔金子ほか 1977〕では角形で短い 1 孔の耳部が 1 点、雨池窯跡〔笹澤 1999〕で双耳瓶の耳部および体部が出土している。

頸城郡域の上越では、5 遺跡で 7 点出土している。子安遺跡〔笹澤 2003b〕では、農業用水路や運河に類する機能を有していたとされる大溝 SD309 の 4 層で、東海系のものに類似する三耳瓶と長い鰭状 1 孔の耳が付く北陸型の双耳瓶が出土しており、同遺構 4 層出土遺物は 10 世紀第 1 四半期に位置付けられている。大二反遺跡〔高橋・杉本 2001〕では、体部下部に丸形 1 孔の耳が付く三耳瓶が出土しており、蛇谷遺跡〔土橋 2005〕では、富山県上末窯からの北陸系双耳瓶の搬入や頸城西窯群での双耳瓶生産の可能性が指摘される。角地田遺跡〔實川ほか 2009〕では、10 世紀中葉の一括遺物がある SD853 で時期差のある完形に近い北陸型の双耳瓶が出土している。

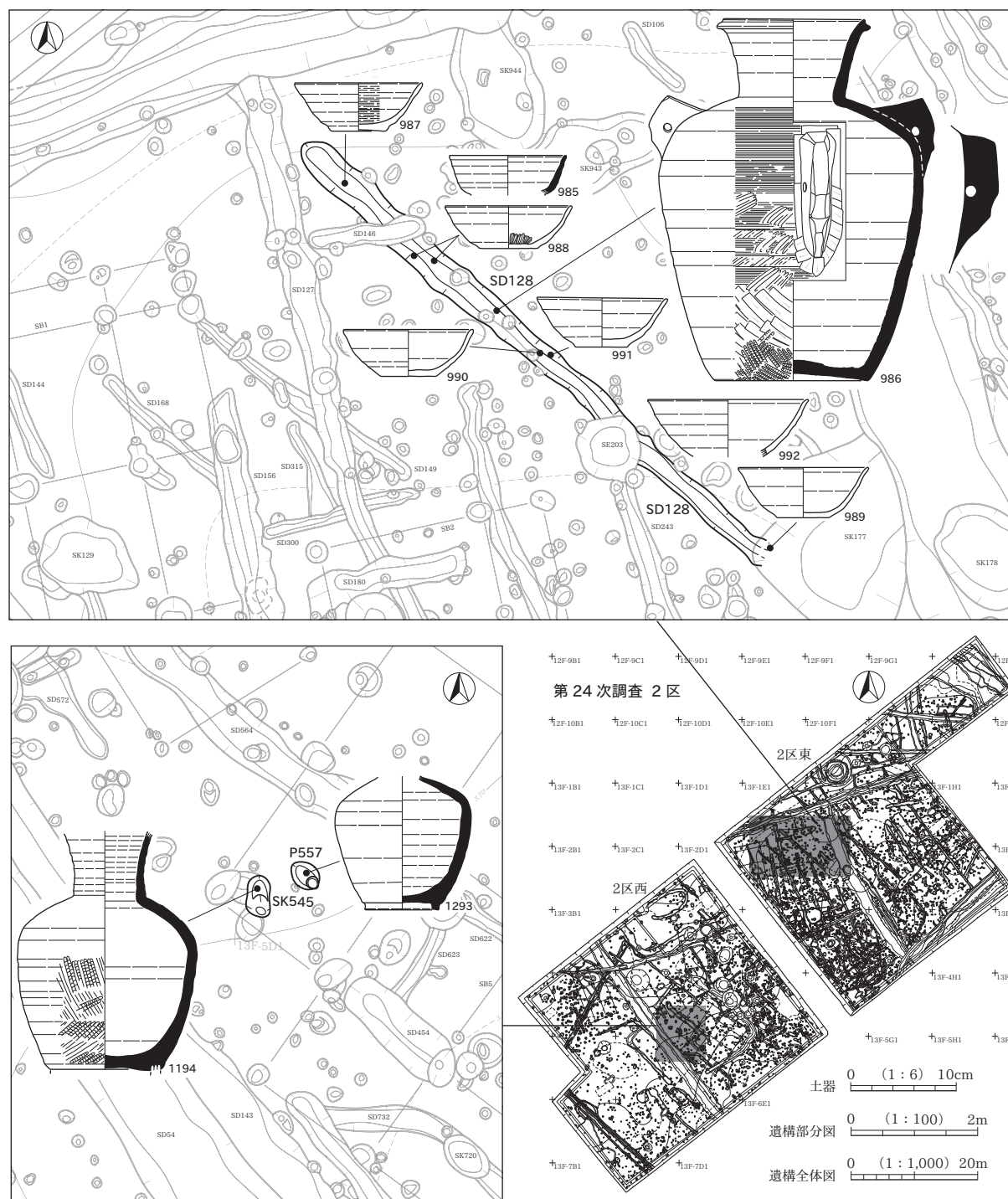
分布の上では、磐舟・沼垂・蒲原郡域に全体の 7 割があり、古志郡・魚沼郡域では、雨池窯跡で生産が確認されるものの、流通は確認できずほぼ空白域となり、頸城郡域に 3 割が分布する。佐渡での出土はない。阿賀北窯では、双耳瓶の出土は確認できないものの、9 世紀前半の五頭山西麓窯跡群狼沢窯跡では戸津窯跡群のものに類似した長頸瓶の生産が認められ〔笹澤 2004〕、中曽根遺跡、新保遺跡などの事例から、沼垂郡を中心とする地域に阿賀北窯産の北陸系双耳瓶が一定量生産流通していたことが確認できる。一方、大沢谷内遺跡・的場遺跡では、産地不明の北陸系双耳瓶がみられ、山木戸遺跡をはじめとする円形に近い 1 孔耳部を有するものを含め、胎土・形状が異なる特徴を有することから、他地域からの搬入品の可能性を指摘しておきたい。上越地方では子安遺跡の三耳瓶に狼投窯群など東海地方との関係を見ることができ、子安遺跡・角地田遺跡・蛇谷遺跡出土の双耳瓶は富山県上末窯をはじめとする北陸地方の影響が認められる。

以上から沖ノ羽遺跡の三耳瓶は、北陸の影響を強く受け阿賀北窯で生産されたと考えられる。容量の面からは南加賀古窯群の中でも戸津 5 号窯の大型ものに最も近く、同窯跡群双耳瓶初現期の 8 世紀中葉～後半まで遡るものではないであろう。また、三耳形の形態をとってはいるが、本来胴下部に付くべき耳が肩部に近い位置にある。北陸系としては垂流に属すと考えられる山形県泉森窯の三耳瓶においても忠実に下部に取り付けているのとは対照的で、本来の三耳形態を志向しているのではなく、二耳形の双耳瓶として作っている可能性もある。阿賀北地域の須恵器生産は基本的に北陸系の技術技法で製作され、8 世紀末以降の生産地の増加や製作技法の変化について笹澤正史氏は、「須恵器生産全体にかかわるような工人が移動したのではなく、情報として生産技法の一部や器種（モデル）が伝わったか、一部の技法を保持する人が須恵器生産にかかわった結果」との指摘をされており〔笹澤 2004〕、そうした痕跡を示す例と思われる。沖ノ羽遺跡三耳瓶の生産時期としては、北陸系大型の二耳形双耳瓶であれば対象となる類例の幅が広がるが、阿賀北窯の稼働期間を考慮に入れ、9 世紀前半とみるのが妥当であろう。

次に沖ノ羽遺跡三耳瓶の出土状況について触れておく。本項冒頭に触れたように沖ノ羽遺跡三耳瓶は、SD128 で食膳具（須恵器有台杯・土師器無台碗）や焼けた状態の台石・礫を伴って、溝をふさぐような状態で出土している。溝で出土する県内例としては、角地田遺跡 SD853、子安遺跡 SD309 がある。前述のように角地田遺跡 SD853 では、完形に近い双耳瓶が時期の異なる土師器食膳具とともに出土している〔實川ほか 2009〕。子安遺跡の大溝 SD309 では、三耳瓶・双耳瓶が海獣葡萄鏡や多数の長頸瓶などと共伴しており、溝掘削と道路造成にかかわる祭祀の可能性が指摘されている〔笹澤 2003b〕。旧河道から出土する例は、中曽根遺跡〔青木ほか 2006〕、腰廻遺跡〔川上 2002〕、石川県中能登町高畠カタタ・スギモト遺跡〔久田ほか 2012〕にある。また、向井裕知氏は、井戸で貯蔵具類が出土する事例について、加賀を中心とする事例と平城京の例を比較されており〔向井 1999〕、壺瓶類が井戸祭祀に伴って入れられる例がある。沖ノ羽遺跡例では、SD128 は調査区内で端部が検出され、他の溝との連続性もないことから、水に直接的にかかわる水路機能は想定し得ず、単純な比較はできない。しか

し、上記の生産時期が妥当であるとすれば、生産から廃棄または埋納との間に大きな時期差があり、時間を経る中でもほぼ完形の状態を保って伝世されたものと考えられることから、意図的に溝に入れられたものであろう。また、SD128 との直接的な関連は不明であるものの、同時期に位置付けられる第24次調査2区西 SK545・Pit557 では、それぞれ高台部・頸部を欠く長頸瓶が埋設されるような形で出土している（第61図）。角地田遺跡 SD853 は10世紀中葉、子安遺跡 SD309 は、9世紀後半～10世紀第2四半期に位置付けられ、SD128 の9世紀第4四半期～10世紀代とも重なる。類例の検討が十分でなく不明な点が多いが、溝に瓶類を入れる祭祀の一形態として本遺跡の例を報告しておきたい。

沖ノ羽遺跡の三耳瓶を通じて、双耳瓶（長胴瓶）の基本的な分布域から外れるとされる越後において〔出越



第61図 三耳瓶他出土位置図

1999)、阿賀北窯群で一定量生産された可能性があり、頸城郡に類似した溝に入れる例があることが把握できた。今回は言及できなかったが、沖ノ羽遺跡では、三耳瓶のほかに須恵器特殊器種として突帯付有耳壺(582)・獣脚(1356)・環状把手付壺(第19次調査〔遠藤・澤野ほか2014〕1292)が出土している。突帯付有耳壺については、信濃で定形化した器種として知られ〔笹澤1986・山田2010〕、前述した角地田遺跡・子安遺跡でも出土がある。こうした器種との出土分布の比較が今後の課題となろう。

第3節 文 字 資 料

A 墨 書

沖ノ羽遺跡の第19次・22次・24次調査では12点(19次2点、22次9点、24次1点)の墨書土器が出土した。

第19次調査で出土した2点(18・78)はどちらも須恵器無台杯で底部外面にヘラ記号が施されているが、墨書部位は体部外面と底部外面が1点ずつである。第22次調査で出土した9点の内訳は、須恵器無台杯3点(383・676・758)、須恵器杯蓋1点(790)、土師器無台碗4点(154・155・239・435)、黒色土器無台碗1点(559)である。墨書部位は、須恵器無台杯3点はすべて底部外面、土師器無台碗4点はすべて体部外面であり、器種によって墨書部位が異なっている。黒色土器無台碗1点は底部外面に「万」が記されている。「万」を記す墨書土器は、第18次調査でも42点(推定によるものも含む。須恵器無台杯4点、土師器無台碗32点、黒色土器無台碗6点)出土した〔遠藤・澤野ほか2014〕。この内の38点は底部外面に記されており、「万」の文字は底部外面に多く記される傾向がある。第24次調査で出土した1点(1054)は土師器無台碗の体部外面に記されている。

文字を判読できたものは5点にとどまる。第19次調査で出土した須恵器無台杯2点(18・78)は、いずれも「三」と判読できるが、18は体部外面に倒位で記し、78は底部外面の2か所に比較的小さく記している。第22次調査で出土した須恵器無台杯1点(758)も「三」と判読できるが、底部外面に大きく記しており、78とは書き方が異なる。

第22次調査で出土した435(土師器無台碗)は、体部外面に正位で小さく「八」と記されている。559は底部外面に大きく「万」と書かれている。「万」は事物の良好な状態を意味する吉祥的な文字と考えられている。なお、239は土師器無台碗の体部外面に正位で、書き慣れた様子の細字で書かれているが判読できない。383は須恵器無台杯の底部外面に比較的大きく記されているようだが、断片資料のため判読できない。

第30表 沖ノ羽遺跡出土墨書土器一覧表

墨書 No.	報告書 No.	出土位置				種別	器種	法量 (cm)			胎土 産地	時期 (春日編年)	備考
		調査次	区	遺構名	グリッド			口径	底径	器高			
1	18	19	5区西	包含層	15E-9C10	須恵器	無台杯	14.1	9.4	4.1	新津	Ⅳ	体部外面・倒位墨書「三」、 底部外面ヘラ記号「×」
2	78	19	5区東	包含層	14F-9F9	須恵器	無台杯	14.4	10.0	5.0	新津	Ⅳ 1	底部外面墨書「三」「三」 底部外面ヘラ記号「/」
3	154	22	1	SE565	15G-8C8	土師器	無台碗	(14.7)				Ⅵ	体部外面墨書「□」
4	155	22	1	SE565	15G-8C8・13	土師器	無台碗	15.0	6.2	6.0		Ⅵ 2・3	SX564 接合 体部外面墨書「□」
5	239	22	1	SX564	15G-8C13	土師器	無台碗	(13.0)				Ⅵ 2・3	体部外面墨書「□」
6	383	22	1	包含層	15G-7D9	須恵器	無台杯				小泊	Ⅴ	底部外面墨書「□」
7	435	22	1	包含層	15G-9E7	土師器	無台碗		5.5			Ⅵ	体部外面・正位墨書「八」 内面剥落
8	559	22	2	SD60	13B-9I20	黒色土器	無台碗		5.0			Ⅵ	底部外面墨書「万」
9	676	22	3	SK131	14D-1G17	須恵器	無台杯		8.5		小泊	Ⅴ	底部外面墨書「□」
10	758	22	3	SD80	14D-1G17・22	須恵器	無台杯	12.8	7.6	3.3	小泊	Ⅴ	底部外面墨書「三」
11	790	22	3	包含層	14D-1G14・20	須恵器	杯蓋	14.4		2.4	小泊	Ⅴ～Ⅵ	外面墨書「□」
12	1054	24	2区東	Pit264	13F-2F7	土師器	無台碗					Ⅵ	体部外面墨書「□」